

ラフマニノフ：
前奏曲 嬰ハ短調「鐘」op.3-2
前奏曲 ニ長調 op.23-4
前奏曲 ト短調 op.23-5

レクチャートーク ～ラフマニノフの演奏について～

チャイコフスキー：
四季 op.37a より 11月「トロイカ」

ラフマニノフ：
前奏曲 ト長調 op.32-5

練習曲集「音の絵」op.33 より 第8番 ト短調

楽興の時 op.16 より 第6曲 ハ長調

休憩

ラフマニノフ：
練習曲集「音の絵」op.39 より 第7番 ハ短調

ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 op.36 (1931年版)
第1楽章 アレグロ・アジタート
第2楽章 ノン・アレグロ～レント
第3楽章 リステッソ・テンポ～アレグロ・モルト

音楽評論家：萩谷由喜子

ラフマニノフ：
前奏曲 嬉ハ短調「鐘」op.3-2

1891年春にモスクワ音楽院ピアノ科を首席で卒業し、翌92年には作曲科の卒業試験にも合格したセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は、同年10月8日(ロシア暦9月26日)のモスクワ電気博覧会で本作を初演して大絶賛を浴びたのを機にピアニスト、作曲家として華々しく世に出ました。出世作となった本作は5曲の小品を集めた「幻想的小品集」作品3の第2曲として初演年に出版されています。曲はクレムリンの鐘の音を模した莊重な響きに始まり、強いアクセントが印象的な主部、3連音による中間部、主部の再現を経て、鐘の音が尾を引いて終わるコーダで結ばれます。初演の大成功以後、彼の演奏会ではアンコールにこれが演奏されないうちは聴衆が帰らないほどの人気曲となり、楽譜も飛ぶように売れましたが、彼がわずか40ルーブルで版権を売り渡していたため、この大人気曲によって懐が潤うことはありませんでした。

前奏曲 ニ長調 op.23-4

前奏曲「鐘」の大成功のあと、ラフマニノフは1901～03年に「10の前奏曲」作品23を、1910年に「13の前奏曲」作品32を書き上げ、全体として、ショパンと同様の24の調を網羅する24の前奏曲の世界を構築しました。このニ長調の前奏曲は「10の前奏曲」作品23の第4曲です。弱音で始まり、アンダンテ(中庸)のテンポでゆったりと歌うように奏されます。時折左手が右手の上を飛び越えて旋律の一部を担当しながら進み、いつしか音量を増して情熱を帯びますが、穏やかさを取り戻して終わります。

前奏曲 ト短調 op.23-5

「10の前奏曲」作品23の第5曲。アラ・マルチャ(マチ風に)と表記されているように主部は歯切れよい行進曲のリズムが特色です。次第に強奏されてクライマックスを築いたのち鎮まり、民謡風の中間部に入ります。それが消え入るように終わりかけたところで行進曲主題が力強く再帰し、しかし音量を減じていって最後は弱音で終わります。

チャイコフスキー：
四季 op.37a より 11月「トロイカ」

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)はペテルブルクの音楽雑誌「ヌーヴェリスト」からの依頼により、1876年の1月号から12月号に各月をテーマとするピアノ小品を連載しました。各曲はすべてロシアの詩人の詩を踏まえたもので、その内容を音楽で描いています。11月の「トロイカ」の原詩の作者はニコライ・ネクラーソフ(1821-1878)。ロシアの冬の雪原を走る3頭だてのそり、トロイカの旅情に託して心の悲しみが歌われます。中間部では動きが出て鈴の音も模倣されたのち、主部の変奏再現となり低音部にテーマが歌われます。

ラフマニノフ：
前奏曲 ト長調 op.32-5

1910年に作曲され翌年出版された「13の前奏曲」作品32の第5曲です。左手の優美な分散和音にのせて右手がロマンティックな調べを奏でます。途中、鳥の鳴き声も模倣されます。

練習曲集「音の絵」op.33 より 第8番 ト短調

ラフマニノフは前奏曲、練習曲など珠玉のような数々の小品を遺しましたが、自身は、短い1曲の中に起承転結を盛り込まねばならないピアノ小品の作曲にいつも苦悩していましたと友人宛ての手紙にぼやいています。実際、ピアニストとして自作演奏の機会が多かったこと、出版社が彼に多くの小品を求めるために、彼は常に小品作曲に追われていたようです。その中には「音の絵(絵画的練習曲)」と名づけられた2集の練習曲集があります。まず1911年に作曲され14年に出版されたのが「音の絵」作品33です。9曲収載予定のうち3曲は省かれたため、本作は第8番といいながら実際は初版の第5曲です。左手が非常に広い音域で奏でる分散和音にのせてほの暗い旋律が歌われ、時に左右の手で旋律、伴奏の受け渡しも行われる難曲で、後半と終わり近くにカデンツァ(即興的独奏部)も置かれています。

楽興の時 op.16 より 第6曲 ハ長調

1896年の10月から12月にかけてラフマニノフは6曲の小品を書き上げ、シーベルトの同名作を思わせる「楽興の時」のタイトルで作品16として出版しました。6曲は全体として組曲を構成する一方、個々の作品としてもそれぞれ完結しているため、独立して演奏される機会もしばしばあります。このハ長調の第6曲はマエストソ(莊重に)と表記された堂々たる終曲で、3つの声部が重厚に絡み合います。

ラフマニノフ：
練習曲集「音の絵」op.39 より 第7番 ハ短調

1920年にベルリンで出版された「音の絵」作品39は、ラフマニノフがロシア時代に完成させた最後のまとまった作品です。収載された9曲はいずれも超絶技巧の要求される難曲揃い。この第7番について、ラフマニノフ自身は次のように解説しています。「主要主題は行進曲で、もう一つの主題は合唱による歌唱です。ハ短調と、そのあと変ホ短調の16分音符で動き始める場面は、絶え間なくどうしようもない小雨を連想しました。この運動が発展していく、ハ短調のクライマックスに至りますが、これは鐘の音です。最後の部分は最初の主題、あるいは行進曲です」。

ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 op.36 (1931年版)

1909年に初のアメリカ演奏旅行を成功させてピアニストとしての評価を搖るぎないものとしたラフマニノフは、作曲家としても1913年までに3曲のピアノ協奏曲と2曲の交響曲を書き上げ作風を確立させていきました。ピアノ・ソナタ第2番は1913年に合唱交響曲「鐘」とほぼ並行して作曲された作品で、曲の随所に同曲、及び、前奏曲「鐘」、ピアノ協奏曲第2番、第3番と同様のロシア正教の教会の鐘の響きが聴き取れます。作曲年の12月にラフマニノフ自身がモスクワで初演し、その後も革命の起きた1917年末に亡命するまでは国内で何度も再演しましたが、残念ながらさほど高い評価は得られませんでした。

そこで彼はアメリカ時代の1931年にこれを短縮改訂しました。それでもなお、彼の存命中は1913年版、1931年版とも演奏機会が少なかったのですが、1973年の生誕100年を機に急激に再評価が進み、現在では両版とも、力量のあるピアニストたちによって盛んに演奏され真価を輝かせています。青年期のラフマニノフ特有の哀愁を帯びたリリズムと濃厚なロマンの漂う情熱的なソナタです。

第1楽章:アレグロ・アジタート、4/4拍子、変ロ短調。鋭い和音と旋律的な動機を組み合わせた第1主題と抒情的な第2主題を中心に展開されます。第1主題は曲全体の循環主題として機能し、第2楽章、第3楽章にも形を変えて登場します。

第2楽章:ノン・アレグロ、4/4拍子～レント、12/8拍子、ホ短調。3部形式。主部では循環主題がゆったりと呈示され、テンポを速めた中間部を挟んで抒情的な楽想が歌われたのち、第1楽章の第2主題で楽章を閉じます。

第3楽章:リステッソ・テンポ～アレグロ・モルト、3/4拍子、変ロ長調。第2楽章から切れ目なく入ります。循環主題が華麗な姿に化身して活躍し、最後は装飾された循環主題で圧倒的な高揚感のうちに全曲を結びます。